



CLUB BULLETIN

R. I. 第 2530 地区

いわき勿来ロータリー・クラブ

◎例会日 毎週水曜日(12:30～13:30) ◎事務所 いわき市植田町中央一丁目6番地の9
◎例会場 ホテルミドリ 〒974-8261 ホテルミドリ内
TEL.0246-62-3737

人類に奉仕するロータリー

第 2669 回 例会 平成 28 年 11 月 9 日(水・晴)

2016～2017 年国際ロータリーのテーマ

会員卓話

生駒 祐健 会員

ロータリーソング 奉仕の理想

— 今月はロータリー財団月間です —



ロータリーの行動規範
越田和徹 会員

◎会長報告—富澤藤利会長

皆さん、今日は。朝晩の気温がかなり低くなって参りました。皆さんの体調は如何でしょうか。今日は会長報告3件をご報告致します。まず、最初は12月21日(水)に予定しております創立55周年記念例会並びにクリスマス家族親睦会についてです。すでに11月1日(火)18時からミドリで打合わせ、11月2日(水)例会後の理事会をへてプログラムの内容、それから招待者が決まりつつあります。その他のことについても内容を決定して皆さんに報告し、ご意見を頂戴し文書にして回覧したいと思います。それから次に11月7日と8日に岡崎南ロータリークラブを訪問しましたのでその件についてご報告致します。3.11の東日本大震災以降いわきの子ども達に対し、岡崎南ロータリークラブの皆様やNPOの小松様等からご支援を戴き、当クラブからも複数回に渡り皆さんが訪問し、岡崎南ロータリークラブの皆様と意見交換や現地で子ども達の支援のお手伝い等をしております。そのような経緯がございますので私も早期に御礼を申し上げるべきであると考えておりました。そこで私から岡崎南ロータリークラブの岡田会長に直接電話を差し上げてその主旨をお話してご了解して戴きました。そのような経緯で7日と8日に岡崎南ロータリークラブを私と生駒パスト会長、斉藤直前幹事、岩元幹事の4名で訪問し御礼を申し上げます。岡崎南ロータリークラブの皆様はロータリーの鏡のような活動をされていると改めて感じて帰って参りました。最後に本日18時よりご案内の通りパスト会長会議を開催致します。特に次年度の副会長、副幹事をパスト会長の皆様に審議して戴きたいと思っております。以上です。

◎ポール・ハリス・フェロープラス5パッチ授与
高萩勝利会員へポール・ハリス・フェロープラス



5のバッチが届いておりますので富澤会長よりお渡し致します。前の方へどうぞ。

◎幹事報告—岩元義春幹事

- ・ガバナー事務所よりインドのポリオワクチン投与活動プログラムご案内が届いておりますので現在回覧中です。
- ・ロータリーの冊子ザ・ロータリアンも回覧中です。
- ・先週、職業セミナーに斉藤隆会員と私で出席して参りました。場所は郡山ユニックス熱海大会議室で佐久間ガバナーの開会点鐘で開会されました。
- ・7日と8日に岡崎南ロータリークラブを訪問して参りましたが皆様にお土産を頂戴して来ましてテーブルの上をご覧ください。また、岡崎南ロータリークラブ岡田会長様から御礼のメールを頂戴致しました。
- ・本日のパスト会長会議はホテルミドリで18時より開催になっております。宜しくお願いします。

◎各委員会報告

◇出席委員会—押田小委員長

本日の出席状況は下記の通りです。なお、本日は出席奨励賞をお渡し致します。名前を呼びますので前の方へどうぞ。富岡会員、後藤会員、富澤会長おめでとうございました。

◇スマイルボックス委員会—富岡小委員長

- ・立冬は過ぎましたが、風邪をひかないように十分注意致します。富岡、山下、高萩、渡邊(國)、木崎、清水、生駒、押田、藤田、赤津(善)、浜津、荒川(清)、関川、添田、嵐、林、金成各会員及び富澤会長、鈴木副会長、佐藤政司会長エレクト、岩元幹事、小熊副幹事
- ・出席奨励賞ありがとうございます。富岡、後藤各会員及び富澤会長
- ・新しい席になりました。宜しくお願い致します。



出席状況

正会員数 56名
本日の出席率 76.86%

本日出席会員数 41名
修正出席率 78.5%

渡邊公平会員
星会員

・前回休んでごめんなさい。

◎会員卓話—生駒祐健会員



鶏は「鳥の中の鳥」

とよばれていた

来年は酉年です。お正月にふさわしい鳥といえば鶴です。「鶴は千年」のたとえの通り長寿の霊鳥です。

お釈迦さまがクシナガラで入滅された時、四方に真っ白い鶴が群がったといひます。おめでたい絵や置物にも鶴はよく見かけます。

来年の干支である酉、すなわち鶏はどうでしょうか。実は鶏は、正月には忘れてはならない鳥です。

人間に飼われたのは4千年前の昔。『古事記』にも「時を告げる鳥」という記述があります。「鶏は太陽の使い」とか「火事を封じる不思議な鳥」という言い伝えもあります。

また古代インドで、仏道修行者のために作られた教えの本には、鶏に学べ、という記述が記されています。まことに勤勉で規則正しい鶏は、鳥の中の鳥であります。十二支の鳥は、やはり鶏だということです。「盆と正月」ももとは同じ行事

正月には様々なお祝いの行事があります。しかし、もともとは夏お盆と一対のもので、半年に一度、先祖さまをお迎える行事でした。実際、昔は盆と同じように、先祖様を迎える御魂祭りが行われていたことが『徒然草』などに記されています。現在、正月は神事とされた傾向が強いようですが、本来は同じ行事でした。

「盆と正月が一緒に来た」という言葉は、両者の類似を端的に語っているのでしょうか。

お正月も先祖さま仏さまを忘れずに 新年の始まり

今の世界、日本では、大晦日の夜中、つまり除夜の鐘をつき始めるときを新年の始まりとします。私たちは元旦の日の出の時や目覚めたときを新年と考え、「明けましておめでとうございませう」と挨拶したりします。ところが昔、世界や日本では一日の始まりは今と違っていました。昔は、日が暮れたときがその日の始まりで、次の日が暮れるまでを一日と考えていました。

大晦日の夜は、すでに新年が始まっているということになるのです。そのため、大晦日の夕方までに正月を迎えるすべての準備を整えて、日暮れとともに年神を迎えて年神祭りを行わなければならないのです。

1年の始めである正月は春の始まり、すなわち「立春」とも考えられており、人々とは春の訪れがもたらす生命の誕生を心から喜びました。「めでたい(芽出度い)」という言葉は「新しい春を迎え芽が出る」という意味があります。また新年に言う「明けましておめでとうございませう」という意味は、実は年が明け年神様を迎える際の祝福の言葉でした。つまり、神様への感謝の言葉を人々の間で交わすことにより、心から歳神様を迎えたことを喜びあったということです。

年神様

正月には、「年徳神」「歳徳神」「正月様」とも言われる神様がやって来ます。年神様は高い山から里に降りてきて、里人に1年の実りと幸福を約束してくれる神様で、正月の卯の日にお帰りになるとされています。古代の信仰では、すべてのモノ、鉱物、植物、動物や人には魂があると考えられていました。

また、穀物の生命(いなだま)と人間の生命(たま)を1つのもと考えていました。

魂はもともと1つのものであり、人が亡くなるとある一定期間を過ぎると祖霊という魂の集合体に入り、常世の神になると信じていたのです。祖霊は春になると「田の神」となり、実りの季節が終わり秋になると山に帰って「山の神」に、そして正月には「歳神様」となって、各家庭に繁栄をもたらすため訪れ、子孫の繁栄を見守ってくれるのだと考えたのです。

年神は祖先の神様であり、また穀霊であったのです。そこで、大晦日から元旦にかけて祖先を祭る「霊祭り(みたままつり)」が各地で広く行われ、墓参りをするのです。

年神祭り

年神祭りははじめとする正月の行事いっさいを取り仕切るのは、「年男」と呼ばれる人たちで、一家の主またはその長男がなります。媒払いから、松迎え、年棚の飾りつけ、注連縄張りしていたるまで、すべて年男が采配を振りました。大晦日の日没とともに、祭壇の灯明をとすために神聖な火をおこします。これを「若火迎え」と言います。それから、「お節料理」や「雑煮」の準備にとりかかりますが、それらに使う清浄な水をくんでくるのが「若水迎え」です。年神祭りの中でも一番大事なならわしは、ていねいに調理し、きれいに盛りつけた食べ物を神様に供えする事です。これは、人間が生きていくうえで最も必要な食べ物神様にささげること、一年を無事に過ごせたことを感謝する意味があるのです。そのお下がりをいただいて神様と一緒に食べることを神人共食と言ひ、それが現在のお節料理なのです。

年神祭りはまず、鏡餅と家族の人数分の円餅を三方や折敷などにのせて、祭壇に供えます。そして、座敷や玄関にも、餅、白米、海老、昆布、柿、栗などを飾った蓬葉を据えます。そのほか、居間や台所、便所にも、小さな円餅を飾ります。そして、夜明けが近づくと、この祭壇に供えてあった人数分の円餅や柿、栗、昆布などをのせた「歳徳膳(としとくぜん)」を、男女年齢順にいただきます。歳徳膳をいただく魂を再生させることができるとされていて、そのため、この膳を「イタダキ膳」とも言ひます

年神迎え

年神をそれぞれの家にお迎えるには、家の中をきれいにします。まず、一年のほこりとすすを落とすために年末には「煤払い」をします。次に、年神が他の世界から降りてくる時に目標とする「依代」として「門松」を立て、そこがお祭りの場所であることを示すために「注連縄」を張ります。そして、家の中には祭壇を作り、年神の来るのを待つのです。年神の祭壇としては、農村に多い「拝み松」、都市に多い「年棚」の二つの形式があります。「拝み松」は、床の間に種もみを入れた米俵を置き、上に松を飾ります。種もみは秋に収穫した米で、翌年の春にまいて再び収穫するためにはなくてはならない大事なものです。人々はその種もみに穀物の霊が宿っていると考えたのです。「年棚」は「年徳棚(としとくだな)」「恵方棚(えほうだな)」とも言われ、目標とする「依代」として「門松」を立て、そこがお祭りの場所であることを示すために「注連縄」を張ります。年神のやって来る方角(=恵方)を向いて拝するよう、台所や居間の天井からつるさされます。この棚に鏡餅、洗い米、お神酒、塩、柿、昆布などを供えます。また、年神は先祖の霊でもあると考えられていたため、位牌と一緒に祭るところもあります。